蕾の悦虐（ロリマゾ）第６話

いじめられっ娘二重唱

（後編）

濠門長恭

目次

登場人物 ..... - 3 -
これまでの粗筋 ..... - 7 -
１１．接着剤で性器密着 .....- 11 -
１２．強制のアルバイ春 ..... - 60 -
１３．女子からのイジメ
１４．休校日にはピアノ
１５．全裸で合同運動会
１６．拷問と補習と虐め
１７．総動員でエロ接待
１８．雪合戦と雪ダルマ
１９．卒業式でピル贈呈
後書き

登場人物

後藤薫子（●５）：クソ
イジメを告発して、かえってクラスメートから疎外されるようになり、山村留学を希望した。『縄と鞭の体育補習』の舞台となった七白学園へのＡＯ進学が内定している。

本郷香純（●３）：カス
父は、村の実力者のジャパユキ奴隷妻を寝取ったうえ、役場の金を横領して駆け落ちした。母は、その弁済の為に都会へ出て熟女ソープでタコ部屋生活を強いられている。
香純は、実力者の家に住み込みで、奴隷妻の代わりをさせられている。村人からも村八分にＳＥＸを加えた村七分の扱いを受けている。

蒲田和夫
街で建設会社を経営している。地方政界へのコネを使って利益誘導することで、村の税収も住民の収入も成り立っている。村の中では、この男に逆らえる者はいない。
『淫乱処女のエロエロ・デビュー』で野原知子のバージンを奪っている。

蒲田峰人（●７）
街でワンルームを借りて進学校に通っている。週末には必ず帰って、香純を嬲っている。

蒲田岳人（●４）
村の分校に通っている。家でも学校でも香純を虐めている。

野原勝利
野原智子の大伯父。死別した妻のボヤ騒ぎで、蒲田に首根っこを押さえられている。薫子の寄宿先。

森篤夫（体育と技術教諭）：モリトク
蒲田の口利きもあって、任期を延長して分校の裏ボスとして君臨している。独身。根っからの両刀使いのサディスト。美少年を強制入部させ、『淫乱処女』のヒロインも紅一点として甚振っていた相撲部は、第２分校との合併時に廃部。

豊田千草（養護教諭）：チグサ
やはり任期を延長している。レズのサディスチン。モリトクのパートナー。

奥村征司（美術と音楽の教諭）

単身赴任。転任したいが、ままならない。女子生徒にヌードモデルをさせてもお咎めなしという環境を捨てがたくも思っている。『淫乱処女』では執拗にヒロインを嬲ったが、香純は（他の教師と同様）たまに性処理人形として使うにとどまっている。

今里勇気雄（駐在さん）
僻村への赴任が決まって、フィアンセに逃げられた。弱みを握られて蒲田の言いなりになっているが、開き直って積極的に加担することもある。

ゲスト出演（全裸で合同運動会）

野原知子（●７）：シッコ
『淫乱処女のエロエロ･デビュー』の３年後。
七白学園のスポンサーに献上されて奴隷妻になっている。

岡下昌美（薫子と同学年）：マゾミ
『鞭と縄の体育補習』と、ストーリイ的には同時進行。

桃井桃花（●３）：シモ
『鞭と縄の体育補習』で、年下の子を相手にレズＳＭに耽っているところを見つかって、（サド教師の命を受けた）昌美に調教され始めたばかり。香純よりも１学年下。

柴田芽衣（●校３年）：メイ
『強制入院マゾ馴致』の２年後。
立派なマゾ牝に性長している。

これまでの粗筋

わたし、イジメを告発したら逆に被害者から恨まれ、クラスからはシカトされて、フリースクールに避難したの。問題は進学だけど、父親の尽力（寄付金？）で名門七白学園へのＡＯ入学が内定した。部活の実績もないわたしは、ＡＯの資格を得るために半年間の山村留学をすることになった。

その初日から、とんでもないイジメを目撃しちゃった。香純ちゃんという精神発達に問題のある子なんだけど。男子全員に輪姦されたりＳＭぽいことされてる。

なんとかしてあげようと思ったら、同級生から忠告された。香純ちゃんの父親は、村役場のお金を盗んで、村の大ボスの奥さんと駆け落ちしたんだそうだ。母親は弁済の為に出稼ぎで不在。香純ちゃんは大ボスの奥さんの身代わりを務めさせられてる。

前のイジメ告発で懲りてはいたけど、でも見過ごせない。強引に香純ちゃんを男子から引っぺがしたんだけど。

「だんしとあそべないんだったら、おねえちゃんとあそぶ」なんて、レズごっこにつき合

わされた。
　それを盗撮されて、拡散させるって脅されて。中ボスみたいな教師のモリトクにバージンを奪われて、アヌスもオーラルも含めて、男子生徒に何度も犯された。
　翌週から、わたしも凄まじい性的イジメのターゲットにされた。お弁当に精液ドレッシングを掛けられて、ためらってるとご飯まで黄色いお茶漬けにされた。土下座して赦しを乞ったら、交換条件として制服を短く切られた。スカートは、まっすぐ立ってても股間が見えてしまうし、セーラー服はかろうじて乳首が隠れるくらい。しかも、これは下宿先のジジイの趣味もあるんだけど、下着はフンドシだけ。
　そんな姿で登下校も授業中も恥をさらして、放課後は香純ちゃんともども体育用具倉庫でＳＭっぽい性的遊戯。最後はもちろん輪姦。
　しかも、教師とも強制懇親会。養護教諭のチグサにまでペニバンで犯されて、クリ刺激のアイテムも同時に使われて、凄絶なバギナ・オーガズムまで開発された。
　九月にずれ込んでるプール授業では、２サ

イズくらい小さなスクール水着を強制されて、股間に食い込ませて後ろ前に着て乳房を露出したら、かろうじて着用できた。そんな姿で補習まで受けさせられて。

週末は香純ちゃんが『月曜まで痕が残る』ほど虐められるのを見学させられて。

ついには、香純ちゃんが一年生のときに、マゾ奴隷妻の身代わりになることを承諾させられた『説得』まで追体験させられた。

性的イジメどころではない、性的虐待と調教の日々が始まった。

１１．接着剤で性器密着

わたしの抵抗は、一方的な敗北に終わったわけじゃなかった。もっと過激な責めもあるから電気鞭にこだわっても意味はないと諭されても、諦めなかった。のと、小便茶漬けに絶対的な拒否を貫いたのとで、わたしの扱い方を人非人鬼畜外道卑劣漢どもも考え直してくれたのかもしれない。

どうしても嫌な命令（責め）に対する拒否権を認めてくれた。その代わりペナルティとして、性質の異なる二つの責めから、どちらかを選ばねばならないし、それを拒否することは許されない。

小便茶漬けは、過激露出制服と引き換えで半永久的に免除されたけど、もし、拒否権のルールが適用されていたとしたら。カレーライスは同じスカトロのジャンルだから選択肢に選ばれることはない。蒲田が挙げた例だと――先を丸めてないワイヤー（肌が裂ける）の電気鞭を背中とお尻と乳房と股間に十発ずつか、プールのコースフロートを前後に突っ

込まれて乳首には（さすがにダンベルではなくて）ひとつずつテニスボールをぶらさげて二十分以内に校庭を十周か、どちらかを選ばされる。もちろん、虐待者の気分で選択肢は様々に変わる。ちなみに持久走（？）のほうは、伝説の知子さんも似たようなことをさせられたそうだ。

このルール。いきなり持ち出されたら絶対拒否する残酷で過激な責めを受け容れさせるなんて、悪辣非道な使い方もできるから、諸刃の剣ってやつかな。でも、奴隷が主人に反逆して勝ち取った貴重な権利ではある。だから、そういう考え方が間違ってる。

もうひとつ、朗報がある。衣替えって、ふつうは十月からだけど、わたしの場合は特例として、九月のうちから冬服が解禁された。膝丈のスカートと、おへそが隠れるセーラー服。胸当てまで付いてる♪　あたりまえのことに音符を付ける必要はないね。

それと、岳人が課した下着の完全禁止。あっさりとモリトクがくつがえしてくれた。

「こういう反抗的な女は、常に発情させておいたほうが扱いやすい」

結び玉フンドシの刺激で、わたしを手なづけるつもり。そう思いどおりになるもんか。

モリトクがくつがえしたっていうより、岳人が考え直したか、背後の蒲田の発案だと思う。モリトクは蒲田の子分と学校のボスとの立場を使い分けてる。どっちの命令にも従わなければならないわたしには、どうでもいいことだけど。

「おねえちゃん、いこうよお♡」

カスちゃんの声で、ちょい驚く。下校のときは男子の魔手から護ってあげてた（今では性的虐待を分かち合うくらいの意味しかない）けど、登校を一緒てのは、今朝が初めて。でもまあ、カスちゃんの通学路上にこの家があるから、自然の成り行きではあるかな。

「ちょっと待ってて」

部屋の中から大声で返事をした。お弁当はもう作らないし、制服以外に着る服がないから、とっくに準備完了――じゃない。

いったんスカートを脱いで、結び玉を作ってある白い布で股間を包んだ。

私服も下着も全部取り上げられてるから、寝るときは全裸。家の中では素肌に制服。フ

ンドシを締めるのは外出のときだけ。こんなの、~~気持ちいい~~歩きづらいだけなのに、どうせお昼休みと放課後は脱がされるのに、ジイサンの厳命。これにも逆らっちゃいけない。

土曜日の拷問以後、わたしの身分（！）は学校共有の性奴隷から、カスちゃんと同じで村全体の性奴隷に堕とされたらしい。はっきり言い渡されたわけではないけど、どっちにしても、誰の言葉／指図／命令にも従ってれば間違いはないと思う。

「きょうのおひるごはん、なにかなあ」

わたしへの質問ではない。わたしもカスちゃんと同じように、性的奉仕や性的辱めと引き換えに男子から餌を恵んでもらう立場になったことは、カスちゃんも理解してるらしい。

「ねえねえ、おねえちゃん」

「ん、なに？」

「きょうのねえ、だんしとのおあそび。カスちゃん、ぱすしたいな」

ええっ……！？

なにされても喜んでて、『とんじゃう』ことに夢中な子が、衝撃の発言。と考えるわたしが、性的虐待に慣らされちゃってるんだけど。

「あのね。きのうね。まんまん、にせものちんちんでびりびりされたの。まだ、いたい」

ディルドを電極にされてバギナに通電されたってことだね。ぐぬうううう……と、怒髪天になりかけて、義憤がしぼんじゃった。電気鞭じゃない。約束は守られてるし、すくなくとも歩いて学校に通えるくらいには健常なんだものね。

だから、いつものようにスキップしないんだ。わたしの感情がたどり着いた先は、そんなしょうもない思いでしかなかった。

わたしだって、いつ同じ目に遭わされるかわからない。電極の一方がディルドなら、もう一方はどこだろう。クリトリスなら超絶特大激痛だろうけど、心臓から離れてるから安全かな。乳首は……心臓に近いから怖い。考えるだけで、ぞわあっと背中が冷たくなって、子宮がきゅううって縮みあがる。そして、結び玉の刺激がいっそう生々しく感じられる。ぬちゃぬちゃぬれてきて、ぐりんぐりんとこすられる。

もちろん、電撃ディルドには戦慄するだけで、結び玉の刺激は生理的物理的な問題だか

らね。両者のあいだに関連はないんだから。なんで、自分に言い訳しなきゃならないんだろ。

――午前中の授業は平穏無事に（わたしを無視して）過ぎ去った。

お昼休みは、いつもいつも拉致されるのは腹立たしいので、三年男子をお供に従える形で二年の教室へ移動してやった。

教室の後ろで香純ちゃんとふたり、鬼畜男子どもに取り囲まれて。ミュージック・スタートとほほほほ。

前と同じ、ダンスの授業で習った振り付けで踊り始める。

あら、カスちゃんもわたしについてきてる。ほんのちょっと遅れてるけど、見てから真似してるんじゃなくて、だいたい覚えてるみたい。木曜日に一度見たきりなのに。カスちゃんは幼児退行を起こしてるわけだけど、記憶力とか運動能力は失っていないんだ。てか、わたしより優れてる？

ストリップダンスが終わると、男子たちはお弁当やパンを食べ始めた。犬座りをして待ってるわたしたちには、何もなし。と思った

ら。手招きされた。足元まで四つんばい。
　岳人と三年生とが、膝の上にビニールシート広げて。
「この上に座れよ」
　カスちゃんは、この~~プレイ~~辱めも経験があるらしく、膝をまたいで恋人同士みたいに、岳人に抱きついた。うんざりしながら、わたしは田村弘の膝に横座りした。こいつを選んだのは消去法。大垣内や清水はサドだし、真鍋と森はしつこい。佐藤は、受けを狙ってなにをするかわからないし。そういえば、高橋くんの姿は今日もなかった。
　田村は口いっぱいにご飯とおかずを頬張って、わざとらしくクチャクチャかんで。そのまま、顔を近寄せてくる。
　あ……口移しで食べさせるつもりなんだ。つもりというより。カスちゃんは岳人の首に腕を絡めて、ちょっと見には熱烈なキスをしてる。
　とっさに考える。逃げたって引き戻されるし、しつこく逆らえば罰だか仕付けだかが待っている。
　諦めて受け容れた。もちろん、自分から顔

を近づけたりはしない。頭の後ろに手をまわされて引き寄せられてキスされても、じっとしてるというだけ。口を半開きにはしたけど。
　ぬちゃっとした生温かなゲロ（も同然だよ！）が、口に押し込まれた。それを飲み込むのは、精液をゴックンするよりも気持ち悪い。悔しいことに、口の中に残ったハンバーグの味は、おいしくないこともない。
「ほらよ」
　ふた口食べさせられたら、乳首を箸でつまんで横へ引っ張られた。隣へ移れってことなんだろう。
　つぎは佐藤だった。ウインナーの端っこを口にくわえて、わたしの口に挿れたり出したり。恋人同士で両側からポッキーを食べるのがあるけど、似ているようで、まったく違う。こいつ、ほんとはもっと太いソーセージで遊びたいんだろうな。
　まあ、ぐちゃぐちゃにかみ砕かれたゲロじゃなかったから、文句は言わないけど。そのぶん、別のことでカチンときた。
　こいつら、ビニールシートを敷いてるんだよ。ズボンが汚れるとでも……汚れるかな。

わたしは結び玉フンドシをずっと締めてたせいで、バギナはじゅくじゅくでラビアまでぬれてるし。カスちゃんは事前のかん腸なしのアナルＳＥＸで汚れたまま平気で家に帰ったくらいだし。

だけどまあ。これまでに比べたら安穏なお昼休みだったかな。

でも、それは嵐の前の静けさだった。

カスちゃんは返してあげてと岳人にお願いしたけど、聞いてもらえなかった。

「おれらの相手は、クソだけにしといてやるけどな」

カスちゃんがどんな目に遭わされたか、わたしよりも知り尽くしている岳人は、それだけは聞き届けてくれた。

今日のメンバーは岳人を含めて二年が三人と三年が三人。六本なら三穴同時で二回、全員がバギナだと一時間半くらいかな。これくらいでは、もう動じない。動じてたまるもんか。面倒だなと思うだけ。

体育用具倉庫へ連れ込まれて。

「ストリップは昼に見たから、もういい。ふたりで脱がせっこしろ」

　それだけじゃすまないだろうと、先読みしちゃう。
「んで、バスルームとか独房でしてたみたいに、濃厚レズな」
　独房ってのは、カスちゃんの部屋のことだろうね。
「ふたり同時にキメろよ。失敗したら、６９の形に縛って、朝まで放置な。永久運動をさせてやる」
「永久運動って？」
　質問したのは田村。こいつは、これまでおとなし目だったのに、お弁当の口移しといい、今日は積極的？
「朝まで小便を我慢できないから、漏らすに決まってる。そしたら、相手の小便を飲むことになって、それが自分の小便になって――これを永久に繰り返すことになるね」
「おお、素晴らしい発明」
　清水が、佐藤みたいなノリで感心する。
「それ、細いチューブとか使えば、ひとりでも可能だな」
　やっぱり、根はサディストだ。
「つぎの罰ゲームにしたら？」

真鍋まで悪乗りしだした。
「茶漬けをあんなに嫌がってたから、きっと面白いぞ」
冗談！
だけど、自分のなら……拒否権は発動しないかな。交換条件が電気鞭じゃ、割りに合わない気がする。
「考えとくけど……」
この中では断トツのサディストが、気乗り薄とは予想外。
「親父、流血は平気なくせして、スカトロは苦手だからな」
転校してから三週間とちょっとの間に聞いた、いちばんの朗報だった。と同時に、こいつらがわたしたちに加える性的虐待も、蒲田の差金が突き刺さってると、はっきりした。
「それじゃ、さっさと始めろよ。制限時間は三十分な」
茶番劇はおしまい。濃厚な百合劇の幕開け。
カスちゃんを可愛がってあげるのは、正直言うと、嫌じゃない。こいつらに見物されるのは嫌だけど。
カスちゃんを引き寄せて、立ったまま抱き

締めて、まずはキスから。すぐ脱がしっこを始めないあたり、観客の目を意識してたりする。

そういえば。先週はレズりかけて、カスちゃんが村のオトナたちからも性奴隷扱いされてるって知って怒髪天モードになって、中断したんだよね。つぎは、ちゃんと可愛がってあげようと思ったっけ。

口を吸い合ったまま、ふんふん鼻で息をして、唇を離すと唾が糸を引いた。

「カスちゃん、脱がしてちょうだい」

自分でスカーフをほどいて胸当てをはずしてサイドファスナーを開けてから、カスちゃんの前で膝立ち。

「はあい。ぬぎぬぎねえ」

けっこう手際よく頭から抜き取ってくれた。

「つぎは、カスちゃんを脱がすね」

攻守所を変えて。カスちゃんのセーラー服を脱がせて、わたしは息をのんだ。逆日焼けした黒い乳房に、赤と白の線が何本も走ってる。赤は血で、白は……裂けた肌。背中を見ると、さらに惨状。X字形の傷がびっしり。

これ、先を丸めたワイヤー鞭の傷痕じゃな

い。まさか、蒲田がちらっと言ってた、切断面がそのままのワイヤー？

尋ねるのが怖い。カスちゃんは股間が痛いといってたけど、まさか……あわただしくスカートを脱がした。

「……！」

太ももにびっしり、縦の線刻。その先は股間に消えている。ディルドをつかった電撃責めだけじゃなかったんだ。

カスちゃん、どれだけ泣き叫んだことだろう。

もしかすると。じゃなくて、きっとそうだ。峰人と岳人の兄弟だけじゃなくて、わたしを屈服させただけじゃ満足できなくて、後から蒲田も加わったんだ。

こんなひどい傷、きれいに治るんだろうか。何年も、もしかすると一生、痕が残るんじゃないだろうか。

カスちゃんへの同情に胸がつぶれそうになりながら。こんなんじゃ、どこをどう刺激しても性感どころじゃない。どうやったらオーガズムまで導けるだろうかなんて、考えあぐねてる自分に嫌悪感。

「お姉ちゃんもぬぎぬぎね」
　かいがいしくも健気に、わたしのスカートを脱がせてくれた。そして、慣れた（とさえいえる）手つきで、フンドシもほどいてくれた。端を結ばずに腰にねじり込むのをジイサンが許してくれたから、そんなに難しくはないんだけど。
「わあ、おねちゃんのにおいがするよお」
　結び玉を鼻に押し当てて、くんかくんかしてる。いつもなら取り上げるんだけど、もう、このまま寝技に雪崩れ込んじゃえと、そのまま押し倒した。
　あれ？　なんか、いつもと勝手が違う。相手が男子じゃないとか、自分から攻めてるってことじゃなくて――そうか、マットが敷いてない。あれって、いつもは男子が敷いてくれてたから、自分でするって頭がなかった。
　中断すると、観客をしらけさせる以前に、わたし自身が冷めてしまいそうなので、硬い床の上で続行。
　カスちゃんに乗っかると背中の傷が痛むだろうから横向きになって抱き合って。おっかなびっくりで胸に手を触れた。ん？　手の平

に収まらない大きさまで成長してる――じゃなくて、腫れてる。
「痛くない？」
　なぜか、ささやき声になってしまう。
「すこしいたい……もっと、ちもちよくして」
　苦痛を上まわる快感を与えればいいんだろうけど、わたしにできるだろうか。
「痛かったら、言ってね。すぐやめるから」
　もちろん、男子生徒みたいにカスちゃんを乱暴に扱ったことはない。でも、今は――自分にするよりもやさしく、そおっと、乳首に触れた。
「やだよお……」
　声が甘いので、つぎの言葉は予測できる。
「もっと、いっぱい、かあいがってよお」
「痛くない？　だいじょうぶ？」
　何度もたしかめながら、だんだん――いつも（というほど、何度もレズってはいない！）と変わらない激しさで乳首を責めた。
「痛いよお……でも、ちもちいいよお」
　痛いけど、気持ちいい。それとも、痛みが快感のスパイスになってる？
　だけど、クリトリスはどうかな。鞭の傷跡

は、何本もクリトリスに向かってる。
　上体を起こして左手で支えて（右手は乳首を転がしながら）、カスちゃんの股間を観察した。
　カスちゃんのクリトリスは、わたしの小指の先っぽほどもあるけど、それが今は親指ほどにも膨れてる。『とんじゃう』ときだって、こんな太くはならなかったはず。腫れてるんだ。でも、切れてたりはしてないから、ひと安心（できるか！）。
　肌の色とほとんど違わなかったラビアも、濃い紫色になってる。内出血かな。
　わたしは息を詰めて、右手を股間に持ってった。慎重に、指の腹でクリトリスの粘膜をなでた。
「うあああああ……！」
　悲鳴じゃなかった。
「ちもちいいよおおお！」
　ぶつけたところを冷やして気持ちがいいとかいう意味じゃなくて、純粋の性感みたい。腫れたせいで超過敏になってる？
「とと、とんじゃうよお！」
　わたしは、慌てて手を引っ込めた。カスち

ゃんを飛ばすときには、わたしも爆発してなきゃいけなかったんだ。
「待って……わたしも、気持ち良くさせて」
　わたしはあお向けになって、逆向きにカスちゃんを上に乗せた。６９を男子に見られるくらい、恥かしくもなんとも……あるけど、指に舌は代えられない。
　なにも言わなくても、カスちゃんはむさぼるような激しさでクンニを始めてくれた。わたしも、お返しに――でも、飛ばさないように気をつけながら。
　カスちゃんの舌が、わたしのクリトリスを掘じくり出した。ちゅるんと吸われて、中身が顔を出すのが感じられた。
　がりっと、きつくかまれた。
「痛いっ……！」
　脳天まで鋭い痛みが突き抜けた。でも、甘い痛みだった。快感はなかったのに……そうか、カスちゃんは、こんな痛みの中から快感を掘り起こしてるんだ。そう思うと、なんだかカスちゃんと一心同体になれたような気がした。
「もっと虐めて……」

生まれて初めて、わたしは苦痛を自分から求めた。マゾっ気とは違うと思うんだけど。

こういうときのカスちゃんは、わたしよりずっと的確に攻めてくる。乳首をつまんで爪を立ててつねりながら、クリトリスも歯でつねる。

鋭い痛みが三点から子宮の奥に集まってきて。大量のマグが、噴出じゃなくて、どくどくとあふれ出した。

痛みしか与えられてないのに快感があるなんて、わたし、いきなりマゾに目覚めたんだろうか。

もちろん、違う。カスちゃんが痛みと同時に性感も得ているなら、わたしもそうならなくちゃいけないっていう自己暗示？

生々しいレズ行為を大勢の男子生徒に見られてるという意識は……露出願望って、たいていの女の子は持ってるよね。ビキニ水着とかミニスカートは、自分の美しい肢体を誇示したいのであって、けっして男を誘ってるんじゃないなんて、矛盾もいいとこ。

あれ？　女子会のときでも、みんな気合を入れるね。でも、男子がいないとスカートを

広げて下敷きで扇ぐし。
　ええい。理屈なんか、どうだっていい。つまり。カスちゃんとふたりきりでレズってるときより、ずっと興奮してるってこと。
　どれだけ痛く責められても、わたしはうんとデリケートに指と舌を動かして、カスちゃんを離陸すれすれに保つ。
　カスちゃんの顔が（クリトリスをくわえたまま）横に動いた。左の乳首から指がはなれる。
　来る……来た！
　ずぶうっと、バギナをうがたれた。指を三本どころじゃなく、五本まとめてるかもしれない。
　マグマが、さらに沸騰していく。
　うあああ……中でジャンケンした！　そのまま手首をひねった！！
「うがあ゛あ゛っ……！」
　叫んだのは一瞬。すぐに口を閉じて、わたしもカスちゃんのクリトリスをこりっとかんで、ずぞぞーっと吸い上げた。
「うああ……じゃうよう！」
　ビブラートのかかった、カスちゃんの絶唱。

「爆発するっ……うあああっ！」
　わたしの悲鳴もオクターブ高い。
　くるんとカスちゃんが身体を回転させて、わたしの股間に片脚を差し込んで、わたしも半身を起こしてカスちゃんと抱き合って、ラビアとラビアでキスして、脚で相手の腰を抱きかかえて、引きつけ合って。
　マグマの大噴火の中をカスちゃんが急上昇していく。そして、そのまま。ふたり融け合って、オーガズムの世界で安らぐ。
　パチパチパチと、お義理の拍手で、性的虐待という現実世界に引き戻された。
「ウォームアップはできたね。約束どおり、クソだけを使ってやるよ」
　うんざりしながら、ほっとした。モンスターにひん死の重傷を負わされながらもお姫様を逃がしてあげる騎士の気分。もちろん設定は女騎士で、コントローラーを握ってるわたしは、（エロゲーじゃないので）暗転した画面を見詰めながら、ヒロインがどんなふうに陵辱されるか想像をたくましくしてたりするんだけど。現実は、そんなに甘くなかった。
「カスちゃんは、もう帰してあげて」

「たまには見学する側にまわるのも面白いんじゃないか」
「それとも、一緒に遊ぶか？」
　カスちゃん、尋ねた真鍋を上目遣いに見上げて、しばらく考えてから。
「きょうは、やだ。まんまん、いたい」
　考えたってことは、つまり、それでもＳＥＸしたかったのかな。
　こんな色情狂を助けてあげようとしたなんて、根本的に間違ってた。という考えには、即座に消しゴム。そういうふうに蒲田やモリトクや男子どもに調教されてしまってるんだ。香純ちゃんは、カスちゃんに幼児退行しなければ、たぶんほんとうに発狂してたかもしれない。
　マットが敷かれて。
　三人一斉でも一人ずつでもなかった。三ラウンド六本勝負。つまり――四つんばいにさせられて、男子どもに強制されてる言い方だと、クチマ●コが三本と同時にメスマ●コが二本でケツマ●コが一本。
　オーガズムの後だったから、三ラウンドとも中規模の爆発をさせられてしまった。

これで、本日の性的虐待はおしまい。わたしには、もしかするとジイサンの悪戯（今のに比べれば、せいぜいそんなもの）が待ってるかもしれないけど、さすがにカスちゃんは休ませてもらえるだろう。

なんて考えたわたしは、どこまでも甘かった。いや、こいつらが底無しの鬼畜なんだ。

「さっきの見てたら、おれらの相手をするより、ずっとふたりで抱き合ってたかったんじゃないか？」

この時点で、岳人がまだなにか企んでいるとは悟った。

「いっそのこと、ひと晩じゅう抱き合ってみるか？」

わたしは、なにも答えない。どう答えても、こいつらは自分が思ったとおりにしかしない。口答えすれば、マイナスαが付け加わるだけ。

岳人が小さなチューブをふたつ取り出して、ひとつを田村に手渡した。

「接着剤……？」

「ふたりをくっつけてやるんだよ」

わたしたちを立たせて。岳人がわたしの下腹部――正確にいうと淫毛に中身を絞り出し

た。
「あ、そういうこと」
　そういうことがどういうことか、わたしにも見当がついた。
　田村もいそいそとカスちゃんの淫毛に接着剤を塗ろうとして、こっちは戸惑ってる。カスちゃんのは、バギナの上半分をかすかにおおう太い産毛みたいなものだから、数滴で間に合っちゃう。ので、大半は皮膚に垂れちゃう。
「きゃは……くすうったいよお」
　カスちゃんが身をよじるものだから、下腹部一面に接着剤が広がった。
「そら、ぎゅうっと抱き合えよ」
　カスちゃんが、力いっぱいに抱きついてきた。
「まだまだ。恥かしがらずに」
　岳人と森、田村と清水。ふたりずつがペアになって、わたしたちの腰とお尻を前へ押し出す。わたしとカスちゃんの脚が交差して、性器が密着する。さらに。森と田村にわたしたちを押さえさせておいて、黄色と黒のロープで、上半身をぐるぐる巻きにした。互いの

背中に回した手も、手首をクロスさせて縛る。
　乳房と乳房が押し合って、むにゅうっとつぶれる。顔は互いに右へ傾けて、頬っぺと頬っぺが密着した。
　マットに押し倒されて、脚をさらに絡ませられて、四本ひとまとめにぐるぐる巻きにされた。もう、自力では起き上がれない。
　腰のあたりに二つ、すこし離れた跳び箱の上にもうひとつ。全部で三つの三脚が立てられた。スマホは置いて帰れないんだろう。小型のビデオカメラがセットされた。
　もう、アダルト（裏）ビデオが十本も作れそうなくらい、本番シーンもＳＭシーンも撮られてるんだから。今さら、こんな姿を撮られたって、おたつくわたしじゃない。
「朝までたっぷりいちゃついてろよ」
　六人の悪餓鬼陵辱者どもが、倉庫から立ち去った。
　まだ九月も半ば。犯されてるときは、汗だくになっても暑いとか感じるどころじゃなかったけど。放置されて身動きもできないと、じわあっと暑さが全身に染み込んでくる。
　カスちゃんが、もぞもぞと腰を動かし始め

た。淫毛が引っ張られて痛い。カスちゃんのは、わたしよりずっとささやかだから、痛くないのかな。

でもなかったみたい。すぐに動きを止めた。

「おまめがひっぱられて、いたいよう」

そうか。毛で保護されてないから、クリトリスがじかに接着されてるんだ。しかも、カスちゃんのは先っぽが剥けてるから、そりゃ痛いよね。

それでも、カスちゃんはくじけない。

「ねえ、なかよしのきすをしようよ」

頬っぺたと頬っぺたが密着して、顔も動かせないってのに、強引に頭を反らせて、いやいやをして、とうとう唇と唇を合わせてしまった。わたしも拒まなかったけど。

だけど。こんな状況で、手で刺激もできないんだから。エッチな気分が盛り上がるはずもない。もごもごずにゅずにゅと、舌の動きがうっとおしいだけ。歯と歯が押しくらまんじゅうをして、痛くはないけど、無機質な不快感しかない。

頭を無理に反らしてるから、すぐに首が痛くなってきた。顔をそむけて、横にずらして。

また、頬っぺと頬っぺで抱き合う。
　ピイイーッ。
　遠くでホイッスルが鳴った。陸上部かテニス部かの部活だろう。
　横向きに寝ていて、わたしの腕が下になってるので、だんだんとしびれてきた。
「向きを変えるから、協力してね」
　とはいえ、こんなぐるぐる巻きにされてたら、寝返りを打つのもひと苦労。わたしが軸になってカスちゃんを身体の上まで持ち上げなきゃならない。
　じたばたもがいて、全身汗みずくになって、なんとかあお向けまで持ち込んだ。
　ああ、もういいや。しばらく、このままでいよう。カスちゃんの手を背中で下敷きにしてるから、いずれは横向きになってあげなくちゃいけないけど。
　やがて。最終下校時刻の放送が、かすかに聞こえてきて。だんだん、薄暗くなっていく。
　ロストバージン直後の大の字張り付け放置の経験があるから、誰かがほどきに来てくれるとは、ちっともまったく考えてない。
　山間部は昼夜の気温差が大きいから、この

季節でも裸でいると風邪を引くんじゃないかと、くだらないことを考えてしまう。だけど。風邪を引いて、こじらせて、寝込んでしまえば、その数日間は陵辱を免れるかな。

　そんなことを考えたら、急にカスちゃんの体温を肌に感じるようになった。雪山で遭難したときは、裸で抱き合って温めうんだよね。じゃあ、これしきのことで風邪を引いたりはしない。

　カスちゃんが、また腰をもぞもぞし始めた。でも、腰を押しつけてくる感じじゃない。

「おねえちゃん……おしっこ、したいよお」

　それを忘れてた！

　言われてみると、わたしもしたくなってる。まだ一時間やそこらは我慢できそうだけど、朝までは、とても無理。

「いいよ。そのまま、しても」

「……おねえちゃんに、かかっちゃうよ？」

「それじゃ、ちょっとだけ待ってね」

　何度目かのじたばたで、カスちゃんをあお向けにして、わたしが上になった。

「たい……いたいよお」

　そうだった。背中は鞭傷だらけだった。

　上下になってる姿勢から横向きになるのは、わりと簡単。
「すこしくらいかかって平気だから、おしっこ、しちゃいなさい」
「うん」
　すぐに股間が生温かくなって、密着したふたりの接点から、おしっこがあふれ出る。わたしの性器には、あまりかかってない。
　モリトクの見立てだと、わたしは『下付き』だそうだから、その恩恵かな。
「ちもち、よかったあ。おねえちゃんは、しないの？」
「今は、まだ大丈夫だから」
　おしっこはマットに吸い込まれて、それがだんだん冷えてくる。ありていにいって、不快。そして、惨め。でも、涙はこぼれない。これしきのこと――レイプやイラマラチオや犬芸や精液ドレッシングや鞭に比べたら、なんてことないんだから。
「ねえ、おねえちゃん」
「ん、なに？」
「おねえちゃんは、がっこうそつぎょうしたら、なんになるの？」

唐突な質問に戸惑ったけど。真面目に答えてあげた。
「次の学校に進学する」
それだけが、わたしに残された唯一の希望であり救済だった。
「そこもそつぎょうしたら？」
漠然とした夢はあるけど、どうせ何年か会社勤めをして(できれば､素敵な恋愛をして)結婚するという、ありふれた人生なんだろうなと、この歳で達観してるところもある。いや、あった。ありふれた人生が、今はとても輝いて見える。
でも。カスちゃんが将来のことを考えるなんて、ちょっと意外だった。幼児退行というのは表面的な現象で、心の奥底では、ちゃんと●三歳の少女なのかもしれない。だから、わたしは本音を伝えた。
「そんな未来のことまで、きちんと考えたことがないな｡これからの三年間で考えてみる」
「ふうん……カスちゃんはねえ、ごしゅじんさまのおよめさんになるんだよ」
ああ、そうだった。カスちゃんは、卒業しても逃げ場がない。

あの油ギッシュ中年鬼畜外道の妻にされるのか。どうせ、マゾ雌奴隷妻とかっていうやつだろうけど。夫婦なら、ＳＭプレイだろうと何だろうと堂々とできる――それが、あいつの目論見なんだろうけど。

――やがて、わたしも我慢の限界に達した。

「わたしも、おしっこするから、ごめんね」

「でも、ごっくんできないの。ごめんなさい」

ああ、やっぱり。そういうこともさせられてるんだ。でも、あいつはスカトロが苦手って話じゃなかった？

岳人が、させてるのかな。それとも。黄金と聖水とはサブジャンルが違うのかな。お茶漬けは和食でカレーライスは……おちゃらける気にはなれない。考えただけで気分が悪くなる。

そのせいか。すぐには出なかった。犬芸の『シーシー』に比べれば、ずっと心理的な抵抗は小さいのに。それとも、たったひとりだけの友達におしっこを引っ掛けることに、抵抗があるのかな。

そう。カスちゃんは、今でもわたしの友達だと思ってる。同じ性奴隷。同病相哀れむ仲

ってやつかな。
　そう思うと、ふわっと心が軽くなって。
　ちょろちょろっと出だして、貯めていたぶん、じゃあじゃあと続いた。
　数分間だけ、ほんわか暖かくて、また腰のまわりが冷えてくる。
「カスちゃん、おなかすいたよお」
　脳天気で太平楽――じゃないと、こんな境遇には耐えられないよね。だから、わたしもお腹が空いてることは、素直に認める。
「ごめんね。今晩は我慢してね」
　なんで、わたしが謝らなきゃいけないんだろう――とは、思わなかった。
　あいつら。カスちゃんと違って、いちいち反発して逆らうわたしを面白がってるんじゃないかと思う。カスちゃんの百の負担をわたしが半分引き受けているのではなくて、わたしに新たな二百の負担が追加されて、合計で三百の虐待を分かち合ってるとしたら――結果として、わたしがカスちゃんを苦しめていることになる。
　なんだか、すごく弱気でマイナス思考におちいってる。

なにかおしゃべりをして気を紛らすっていう女の子の得意技も、今は喉が渇いてるので、しゃべりたくない。
うじうじもんもんとするうちに夜が更けて、やかましいほどだった虫の鳴き声も途絶えて。いつかふたりとも、底なし沼に引きずり込まれるように眠り込んでいた。

お尻を蹴飛ばされて、目を覚ました。もう、すっかり明るくなってる。この季節なら五時半くらいだろうか。
「こんな縛り方では、緊縛美もへったくれもあったもんじゃないな」
モリトクの声だった。どんな縛られ方をされたって、美しくなんかないわよ。
「とりあえず、ほどいてやろう」
滅多に聞けない、モリトクのやさしい言葉。でも、やりかたは残酷で無慈悲だった。ほどいたロープの端を持って、斜め上へ引き上げた。わたしたちの身体は、ごろごろと転がる。
「いたいよお……」
「こういうときはな。『あーれー、お殿様あ』と悲鳴をあげるんだ」

「カスちゃんは怪我をしてるんです。肌を刺激しないようにしてあげてください」
　わたしの訴えは無視されて、いっそう勢いよく床の上を転がされた。
　ロープがほどかれても、わたしたちは密着したまま。
　モリトクがカッターナイフを出して、いっぱいに刃を繰り出した。
「じっとしてろ。それこそ、怪我をするぞ」
　わたしたちを横に転がして、密着している部分に刃をこじ入れた。
　ぎしぎしざしざしと、接着剤をこそぎ落す感触が、肌に伝わってくる。
　十数時間ぶりに、惨めな抱擁は終わった。
　モリトクがカスちゃんをあお向けに押さえつけた。小さな缶からボロ布に液体を染ませている。
　つうんと鼻を衝く臭いは、シンナーみたい。
　そのボロ布で股間をごしごし拭いて、カスちゃんに悲鳴をあげさせる。
「いたいいたい……やめてよお！」
　背中と同じくらい、股間も鞭で切り裂かれてる。そこを強くこすられたら、せっかく張

ったカサブタも剥げて、刺激の強い液体が傷口に染み込む。
　だけど、モリトクの残虐はそれだけじゃなかった。膝頭でカスちゃんの肩を押さえておいて、缶の液体を股間に垂らして。ライターを取り出して火をつけた。
　ぼうっと、青白い炎が燃え上がった。
「きゃああああっ……あついあつい……」
　カスちゃんの悲鳴は、すぐに途切れた。液体が、あっという間に燃え尽きたから。
「いたいよお……まんまん、いたいよお」
　カスちゃんが泣きだした。虐待が（とりあえず）終わったと察した、安心の涙だろう。カスちゃんが終われば、つぎはわたしの番。
　わたしは、蹴られる前にあお向けに寝転がった。
「なかなか素直になったな。しかも、こちらの意図を察して自分から動く。もう、一人前のマゾ雌奴隷だな」
「わたし、マゾなんかじゃありません！」
「そうだったな。学校共有の性奴隷、公衆便女だった。マゾに仕込むのは、これからだ」
　仕込まれてたまるもんか。でも……フンド

シの結び玉で感じてるなんて知られたら、マゾの証拠だとか言われそう。
　モリトクが、わたしの股間を虐めにかかった。ナイフで短く刈り取られた淫毛を逆なでされて、引きつれて不快。これしきでは、もう痛いとはいわない。鞭とかのときに、取っとく。
「おまえは一人前だから、フランベも盛大にしなくちゃならんな」
　びちゃびちゃと、カスちゃんの三倍くらいたっぷり、液体を股間に注がれた。けど、フランベって……料理でよくやる炎の演出だけど、モリトクには似つかわしくない単語だ。
　ぼうっ……盛大に炎が上がった。
「熱いっ……！」
　叫んだけど、実は無茶苦茶に暖かいって表現が合ってる。熱湯をぶっ掛けられた（経験も、もちろんないけど）よりは、ずっと穏やかだった。
「股を開け」
　炎が消えると、今度はそけい部に垂らされた。また炎が燃え上がって、すぐに消えた。
「可愛くなったぞ」

モリトクが下腹部を手の平で逆なでした。淫毛が引きつれる感触がなかった。
身体を起こして、そこを眺めると――肌が赤くなってるのが見えた。つまり、淫毛が根こそぎ焼かれていた。
淫毛をそるというのは、ＳＭ系のＡＶにあるそうだけど（そこまでわたしの守備範囲は広くない)、形を整えるのにカミソリでは肌が荒れるから線香で焼くとかいうのも聞いたことがあるけど、燃やすなんて実に男らしくて豪快――なわけがあるかあ！
「それにしても、派手にぬらしたものだな」
モリトクの視線の先はマット。
「学校の備品を汚損した罪は償わせてやるぞ」
洗えばいいでしょ。だいち、わたしたちのせいじゃないし。なんて正論は封止。厳罰の言い渡しを神妙に待つ。
「とりあえず、マットはゴミ捨て場へ運べ」
折りたたんで、カスちゃんに協力してもらって両側から持ち上げて、横歩きで十メートル先のゴミ捨て場まで運んだ。もちろん、全裸でだよ。
「もう六時をまわったか。早朝補習を始める

ぞ」
　そうだった。火曜と木曜はプールで虐められる日だった。だけど、五時限目と六時限目もプール。放課後は、カスちゃんが早帰りした蒲田に虐待される日だから、男子は全部わたしが引き受けさせられる。人数はそれなりに調整してくれてるみたいだけど、それでもきつい。
　それに。緊縛放置されてたから、眠ってはいても疲労が抜けてない。どころか、蓄積してる。でも、拒否権を発動したら三倍返しか十倍返しか、知れたもんじゃない。
「カスも来い。小便まみれでは臭くてかなわん」
　というわけで、二人してプールへ自主連行。
　――補習（虐待）は、拍子抜けするくらい楽だった。カスちゃんの拘束具（ベルトと金属製の手かせ足かせ）は、登場しなかった。
「あれは、蒲田様が特別に貸してくださった物だからな」
　だからといって、カスちゃんに装着されたわけじゃない。
　カスちゃんは、プールサイドで身体をホー

スの水で洗われただけで、無罪放免。だったんだけど。
「カスちゃん、けんがくする」
　別にカスちゃんが見てたから手加減したんじゃないと思う。わたしを放課後まで虐め抜くために体力を温存させたんだろう。
　全裸で、前後に二本のフロートを突っ込まれてロープをフンドシみたいに巻いて固定されて、平泳ぎで二十五メートルを休みなしで四往復。それだけ――て軽く言ってしまうまでに、わたしは鍛えられていた。
　あ、フロートだけど。直径は六センチちかいと見積もってたけど、きっちり五十ミリだそうだ。とすると、カスちゃんの極太バイブは五センチじゃなくて四十五ミリくらいかな。どうでもいいことだけど。それとも、五センチが限界ってことは、わたしのバギナは、まだまだ『きつい』と自慢していいのかな。どうせ、鬼畜を喜ばせるだけだね。
　軽くこなしたような言い方をしたけど、こないだまで平泳ぎは満足に息継ぎもできなったんだから。二百メートルは相当にきつい。プールから出たら、フロートに串刺しにされ

たまま、床で大の字。竹刀をお腹に突き入れたりされないよう、モリトクの動きを警戒しながら。
「あら、カスちゃんもいたの？」
　チグサの声。そちらに目を向けると、野暮ったいパンツルックをしてバスケットを提げた姿があった。
「クソちゃんと森先生のしか準備してないんだけど」
　モリトクがバスケットの中をのぞいて。
「俺はいらん。公衆便女と同じ物が食えるか」
「それじゃ、カスちゃんにもあげるわね」
　チグサがサンドイッチとか牛乳パックとかを床に転がした。この村にはコンビニもスーパーもないから、昨日のうちに隣村から買ってきといたんだろう。
「うわあ、うわあああ、おいしそうだよお」
　カスちゃんが、すささささっと四つんばいで駆け寄って、サンドイッチの前で『マテ』のポーズ。
「犬芸はしなくていい。勝手に食え」
　慈悲に満ちあふれた寛大なお言葉。フンドシを緩めてペニスを（精液ドレッシングのた

めに）引っ張り出す気配もない。
　わたしも起き上がって。それでも、おどおどと念を押す。
「これ、いただいてもいいんですね？」
「あら、ずいぶんとお行儀が良くなったわね。いいわよ。足りなければ、おにぎりもあるわ」
　三角サンドイッチが四つと甘い系のパンが三つ。さらにおにぎりも四つ。女の子二人分の量じゃない――と、思ったんだけど。睡眠不足で、しかも疲れ果てて、食欲なんか、これっぽっちもなかったんだけど。
　サンドイッチをひとかじりして胃袋に落とし込むと。空腹が猛然と覚醒した。考えてみたら、昨日のお昼に男子どもから口移し（うげえ）で少量を食べさせられただけで、ずっと食べてない。
　黙々と食べ続けて、ふと我にかえったら、食糧の山が消え失せていた。名誉のためにいっとくけど、わたしが食べたのはサンドイッチを二つとチョコデニッシュとおにぎりを一つだけだからね。
　サンドイッチ二つと、菓子パン二個とおにぎり三つはカスちゃん。底無しの胃袋だ。

「おなか、いっぱいだよお」

そりゃ、そうでしょね。

食欲が満たされただけで、こんな幸せな気分になれるんだ。

惨めな身支度を始めても、幸せな気分が続いてた。昨日のフンドシは、結び玉にエッチなお汁が染み込んでカビガビになってるけど、じきに体温と新しいお汁で軟らかくなるだろう。そして、ここでも幸せ気分が盛り上がった。結び玉に淫毛が引っ張られない。燃やされてしまったもんね。だから、身体を動かすと滑らかに食い込んで滑らかにこすれてくれる。~~苦痛がなくて快感ばかり。~~

まともな制服に身を包めるのも、すごく幸せ。ノーブラで乳首がこすれるのさえも、結び玉の刺激と連動して……いかん。寝不足と疲労とで、頭が壊れてる。

なので。一時限目が始まって十分かそこらで、わたしは爆睡モードに突入。授業前後の挨拶も、絶賛大放置。

目が覚めたのは、お昼休みが始まった直後。椅子から突き落とされて、床に身体を打ちつけちゃ、さすがに眠気も吹っ飛ぶ。

「美術教室へ行けよ」
　そう言ってから、清水は二年生の教室へ向かった。てことは、カスちゃんはいつもどおりに男子どもから遊ばれるんだ。
　わたしはモリトクやチグサに遊ばれるのかな。でも、美術教室って？
　行ってみて、理由がわかった。そこにいたのは、モリトクと奥村とチグサと、英語のエミ先生。いや、この場にいるんだから、こいつも鬼畜外道だ。エミだ。
「先週の水着は小さすぎたな。今日のプール授業は、ぴったりフィットで泳がせてやる」
　わたしは、全裸になって手を頭の後ろで組むポーズを命じられた。
　奥村が紙テープをわたしの身体に貼り付けて、ブラジャーとショーツの輪郭を作った。いや、ビキニ水着だ。
　ペンキ缶が持ち出されたので、こいつらの企みがわかった。ボディペイント。たしかに、ぴったりフィットだね。
　モリトクと奥村が刷毛を持って、わたしの前後に立った。シンナー臭が鼻を直撃する。
「これ……ラッカーかなにかですか？」

だったら、皮膚炎とか起こすかも。鞭で肌を切り裂かれたりするんだから、皮膚炎を心配してもしょうがないんだけど。
「アクリル系の塗料だ。乾けばフィルム状の被膜になるから、薄い水着そのものだ」
モリトクが胸を、奥村がお尻を塗り始めた。明るめの紺色。
冷たくてくすぐったい。シンナーの臭気から逃げようとして顔をそむけたら、動くなって叱られた。
塗り終わる頃には頭がふらついてた。
輪郭にされてたテープが剥がされて。まだ終わりじゃなかった。
「それじゃ、三枝先生。仕上げをお願いしますよ」
モリトクが筆を押しつける。エミは気乗り薄な様子で、輪郭に沿って白い線を描いた。それから筆を替えて、胸の谷間とおへその下に黄色のリボンを飾った。
最後に、奥村が細い筆で濃い目の紺色を縦にささーっと走らせた。
モリトクが、撮ったばかりの画像を見せてくれる。すくなくとも二次元レベルでは本物

と見分けがつかない。拡大すると、微妙にしわが寄っているようにさえ見えるのがわかる。
　だけど、このボディペイントには根本的なミスがあると思う。学校指定の水着になってない！　ツッコんだりはしないけど。
　美術教室からプールまで、ビキニ水着（実は全裸）で移動。モリトクが（こいつは、ちゃんとジャージを着てる）引率してるので、男子どもも手を出してはこなかった。
「わを、んんん！　ボディペイントじゃん」
「薄いフィルムを着ているんだよ」
　モリトクが、いちいち訂正する。
　――カスちゃんのほうは、ほんとに完全な（念押ししなくていい）全裸だった。逆日焼けは仕上がってるし、真夏よりも陽射しが弱いので、局部露出全身タイツは、もう要らないってことなのかな。この逆日焼けは水着じゃなくて下着代わりのはずだけど。
　だけど、わたしたちのエロ・コスチューム（？）よりも、チグサの水着がある意味エロエロ。学校指定の水着。熟女がスクール水着だよ。
「プール授業は、あと一回で終わりだ。最後

は締めるから、今日は自習にする」
　モリトクの言葉に、主として男子から歓声が上がった。プールで自習とは、つまり水遊び。それとも、性奴隷虐め？
　後者みたい。
「クソ、Ｙ字バランスはできるか？」
　いきなり振られた。
「できません」
　転びます。
「やってみろ。先生が支えてやる」
　がしっと羽交い絞めにされた。もちろん（？）乳房をわしづかみにされてる。
　右脚を水平まで上げると、モリトクが膝をつかんだ。ぐいいっと、上へ引き上げられる。
「い、痛い……」
　のは、確かだけど。顔が燃えるような恥かしさ。だって、ボディペイントなんだよ。
　男子が群がってきた。わざわざしゃがんで、わたしの股間を見詰める。
「へええ、女子の性器って、こんなになってたんか」
「俺、初めて見たわ」
　性的虐待に加わってない一年坊主の言葉じ

ゃない。二年の清水と吉田だった。
「おまえな。カスもクソも、さんざ見てるじゃないか」
　わたしに代わって佐藤がツッコんでくれた。
「だって、ＳＥＸのときはそれどころじゃないです。それに、こんな明るい場所でじっくり見るのは、これが初めてですよ」
　どっと笑い声。そう言えばそうだという声も聞こえる。
「一年生も遠慮することはないぞ。これも保健体育の一環だ。女性器の構造をよく観察しておけ」
　モリトクにけしかけられて、一年男子も喜び勇んで群がってきた。
「ねえねえ、カスちゃんはひとりでできるよ」
　わたしの横にならんで、すぱっと、きれいなＹ字バランス。わたしよりずっと長く、アクロバティックな体位で鍛えられてるから、当然かな。
「カスちゃんはクリトリスが発育してるわりに、小淫唇が小さいのね。クソちゃんは、クリトリスが小さくて包茎だけど、小淫唇は性熟している。見比べてごらんなさい」

チグサまで悪乗りして、わたしたちの性器を比較したりする。
「モリトク先生はクソちゃんが下付きでカスちゃんは上付きだというけれど、アヌスからバギナまでの距離は、そんなに違わないでしょ」
一年生だけは、神妙くそ真面目な顔で、わたしたちの股間を注視している。二年と三年は、もう見飽きたって感じで、三々五々とプールに向かい始めてる。
女子は、一年から三年まで、とっくにプールの中。わたしたちには背を向けている。
Ｙ字バランスの見世物が終わっても、辱めは終わらない。
私とカスちゃんは、プールサイドにつかまって、カエル脚の練習を命じられた。すぐ近くでというより真後ろで、ゴーグルを着けた男子が潜水を始める。でも、一年男子がほとんど。上級生の興味は、性奴隷でない女子生徒に向かった。
意外と和気あいあいで~~微エロっぽい~~健全な雰囲気が漂ってる。女子の気が知れない。同性の同級生を性的に虐待している鬼畜の目に、

身体の線もあらわな水着姿をさらして平気なんだろうか。自分もわたしたちと同じように犯される可能性を考え――ないんだろうね。カスちゃんは犯罪者の娘なんだし、わたしはよそ者。そして、あなた達は善良な市民じゃなくて村民。

だけど、ペットを虐待する男は、女の子に嫌われるよね。性奴隷はペット以下ということかな？

それとも。わたしたちはシチブだから、かかわったら自分にとばっちりが来るから、シカトするのと同じで、男子の性的虐待も『なかったこと』にされてるんだろうか。

もしかしたら。わたしたちで修業したＳＥＸの成果を自分で（もちろん、うんとやさしく）試してほしいなんて思ってる子もいるんじゃないかな。

なんか、わたしの考え方。どんどん変わってきてるような気がする。

その後は、カスちゃんはできないので、わたしだけが背泳ぎ。乳房も股間も見放題。一年男子だけが、プールサイドに鈴なり。

最後にフロートを二個挿しで二百メートル

を泳がされたときには、一年生の関心も同級の女子生徒に移ろっていた。

授業後の着替えは、男子が手伝ってくれた。着替えというか、肌に塗られたペンキ剥がし。ほんとに、フィルム状にぽろぽろ剥がせた。ので、男子どもが面白がったというわけ。それでも残った部分はシンナーで拭き取れって、モリトクに言われたけど、剥げない部分って、ひだひだの奥とかだから。かぶれるのは嫌なので、自然に剥がれるまでほっといた。

１２．強制のアルバイ春

「おまえも、かなり性奴隷の境遇に慣れてきたな」

　自分のペニスでわたしをしゃべれない状況にしてるとき、モリトクがそんなことを言った。慣れてなんかないわよ。我慢してるだけ。淫妊自嘲なんて駄ジャレが頭に浮かんだ――やっぱ、慣れちゃったのかなあ。

　ちなみに、バギナは三年担任で理科の佐々木にふさがれてる。こいつは、今日が初めて。これで、ふだんは本校にいる教頭先生を除いて、男性教師全員に犯されたことになる。こいつはジモティで既婚者。村での評判とか奥さんの目とかを気にして、おとなしくしてたのかもしれない。でも、ひとりだけ参加しないのも孤立やイジメの入り口だから、仕方なく参加したのかな。

「明日は、おまえもカス募金を手伝ってやれ」

　モリトクの言葉で、考えは中断。

「んん……？」

　しゃべれないので、鼻声で質問。

「カスの親父が村役場の公金を横領したのは知っているな」
　思っきし喉の奥まで突き立てられた。
「んぶぐぇう……」
「すこしでも返済できるように、月に二度か三度は、村の有志に募金をお願いすることがある。それが、明日だ」
　それって、つまり……
「跡始末を含めて十五分で千円だが、実際には一時間で五回転はするし、原則は二人ずつだから、時給で言えば一万円だ。割のいいアルバイトだろ」
　モリトクが口をつぐんで、わたしの頭を両手でつかむと、がしがし揺すぶり始めた。腰も激しく突いてくる。そのたんびに、鼻がモリトクの淫毛にめり込む。喉の奥が痛いし、クシャミが出そう。
　それでも、わたしは唇をすぼめて、舌でペニスの裏側をくすぐる。教えられたことを忠実に守ってるから、最近は竹刀も腹パンも免れてる。
　一週間ぶりに順番がまわってきた二年男子よりも多い量の精液が、喉の奥にたたきつけ

られた。タイミングが合わなくて、もろに精液を吸い込みかけたこともあったけど、今ではそんなヘマはしない。ちゃんと喉の奥に貯めてから、ゴックン。

足洗い場へ行こうとするわたしの背中に、モリトクが追い打ちをかけてきた。

「拘束時間は午前九時から午後七時までだ。十万円以上の稼ぎになるぞ」

てことは、お昼休みもなしで、ご飯も食べさせてもらえないんだ。

身体をきれいにしたあとは、チグサとの濃厚熱烈レズプレイ。モリトクも佐々木も、ずっと見物してた。一時間ちかくもだよ。

つまり。一時間ちかく、大爆発で木っ端みじんに砕け散っては、その破片をかき集めてまた大爆発の繰り返し。懇親会が終わっても、そのまま何時間も保健室のベッドで破片のままだった。

そして、土曜日。前もって指示されてたとおりに全裸待機してると、午前七時半にお迎えが来た。チグサでもモリトクでもなく、蒲田。こないだ載せられたベンツとは違う、似

たようなシルバーグレーだけど、見たこともないエンブレムの大型車で運転手付きだった。
　後ろの席にビニールシートを敷いて、真ん中に蒲田がふんぞり返って、右側に全裸のカスちゃん。わたしは左側に乗った。助手席には峰人。岳人は取巻きを何人か引き連れて、遠くのテーマパークへ泊りがけで遊びに行ってる。そりゃ、ほとんど毎日じゃ性的虐待にも飽きるよね。
　わたしが座ると、蒲田がペチンと太ももをたたいた。
「脚を開け。気の利かんやつだな」
　これくらいのことでは、もうむかっ腹も立たない。わたしはカスちゃんを見習って、開いた右脚を蒲田のももに乗せた。
　蒲田が左手をわたしの股間に差し挿れてきた。ちなみに、右手はカスちゃんをなぶってる。
　座席にビニールシートの敷かれているわけが、わかってきた。エッチなお汁で車のシートを汚さないためだ。意地でも、ぬらしたりするもんか。
　その気になれば、蒲田もやさしく丹念に女

性器を愛ぶすることくらいはできるみたい。モリトクはともかく、他の男性教師とは経験値が違うと思う。もう半年以上もカスちゃんをいじってるし、その前はマリンとかいう若いジャパユキさん。峰人と岳人を産んだ最初の奥さんもいる。

わたしの意地ではなくて時間が、エッチなお汁を阻止してくれた。学校まで十分もかからずに到着。モリトクとチグサが待ち受けていた。

校庭の隅っこにひっそりと設置されてる鉄棒のとこへ連れて行かれた。小学校にあるみたいな、背の低いやつ。わたしとカスちゃんは、乳房を鉄棒に乗せて両腕をいっぱいに広げて縛りつけられた。足も開かされて、足首を鉄柱につながれた。お尻を後ろに突き出して、顔も腰の高さ。無理なく前後にペニスを受け挿れられる姿勢だ。

鉄棒は三連で、わたしが真ん中でいちばん低い左側にカスちゃん。背の高い鉄棒にはいくつかのバスケットが掛けられた。

古い施設ばかりの学校の中で、プレハブの体育倉庫よりも、さらに新しい。まさか、こ

れが目的で蒲田が寄付したとか――ありそうな話だ。
「松野。わしと一緒に口開けといこう」
　ぺちんとお尻をたたいて、蒲田がわたしの後ろに立った。
「それでは、ご相伴にあずかります」
　お抱え運転手が、バスケットの中から小さな包みを取り出した。
「おまえは生でかまわん」
　これから来る人たちにはコンドームを着けさせてくれるみたい。そうか。生徒はほかの女性とＳＥＸする機会なんてないだろうし、蒲田やモリトクたちはじゅうぶんに注意してるとしても、村人全員までは管理できないもんね。わたしたちの身の安全も、最低限（の百分の一くらい）は考えてくれてるんだ。
　お抱え運転手がわたしの前に立って、ズボンとパンツを（順番に）ずり下げた。
　こいつは蒲田よりも老けてる。でも、ジイサンとは（当然だけど）比べものにならないくらいに元気。もう、水平くらいには亀の頭をもたげてる。
　そいつは、伸び上がり気味になって、ペニ

スをわたしの口に近づけた。
　わたしは、無表情無感動にそれをくわえた。
　運転手は、じっとしている。つまり、わたしに奉仕させるつもり。なので、なめてしゃぶって、バキュームして、頭を上下に揺すった。手首の縄は鉄柱につながれてるけど、すこしゆとりがあるから両手で鉄棒の端を握れば、下乳を支点にして、ある程度は肩を動かせる。冷たくて硬い鉄棒で乳房をマッサージされるのは、意外と心地良い。マグマは冷え切ったままだけど。
　蒲田が、わたしの腰をつかんだ。フェラチオ奉仕は苦行でしかないのに、縛りつけられてエッチなことを強制されるのって、屈辱と恥辱（どう違うんだろ？）でしかないのに。そういうことをされてるって意識が、バギナをすこしだけ湿らせてて。あんまり苦痛もなく、にゅぶうっとペニスを受け挿れてしまう。
「ああん、おねえちゃんだけ、ずるうい。カスちゃんもあそびたいよお」
　カスちゃんが自ら進んで性的虐待をおねだりするのを見て、軽蔑したこともあった。でも、蒲田の『説得』を追体験させられた今は

違う。淫乱になることでしか、現実を受け容れられなかったんだ。
　わたしも……マゾに目覚めて、カスちゃんみたいに性的虐待に順応できれば、これからの半年が楽になるだろう。
「痛い。かむんじゃない」
　髪をつかまれて頭を引き起こされた。
「もめんなはい」
　それでもペニスをくわえたまま、形だけは殊勝に謝って。フェラチオを続ける。
　無意識のうちに、顎に力がこもっていた。歯ぎしりしようとしたのかもしれない。やっぱりわたしの本心は、投げ遣りな考えを否定している。
　モリトクとチグサが、カスちゃんと遊んであげてる。モリトクがクチマ●コで、チグサはメスマ●コ。強烈なイソギンチャクバイブがケツマ●コを刺激して。
「うあああああ、すおいおお……」
　たちまち離陸して急上昇。最初からそんなハイペースじゃ、十時間も持たないよ。
「こら、自分でケツを振れ」
　ぺちんとお尻をたたかれた。

「気分を出させてやろう」
　蒲田がわたしにおおいかぶさって、鉄棒で持ち上げられ気味の乳房を両手でつかんだ。いや、包んだ。けっこうていねいに、でも愛ぶじゃなくて、もにゅもにゅとこねくってくれる。
　なんか、中途半端。ふつうの子だったら、もっとやさしくもんでほしいと思うだろうし、マゾだったら、もっと乱暴に痛くしてほしいと思うかもしれない。わたしは……どっちなんだろ？　迷うくらいには、マゾに調教されかけて……たまるもんか！
　運転手はじきに射精してくれたけど、蒲田はわざと長引かせている。そしてモリトクとチグサは。
「あああああっ……とんじゃうよおおお！」
　カスちゃんを追い上げ続けてる。
　運転手がどいたので、校庭を見通せる。バイクが校門をくぐって、こちらへ来るのが見えた。すぐ後ろに軽トラックも現われた。
　ええっ……！？
　声には出さなかったけど、驚いた。そして、すぐに納得して諦めた。

軽トラックに乗ってるのは、お向かいに住んでる一年生の小谷絵里奈ちゃんの父親と、その二軒先の沼野――以下、『さん』は抹消。
蒲田が射精してわたしから離れて身づくろいを終えるまで、バイクの青年（名前は知らない）を含めて三人は、すこし離れた場所で山の景色とか眺めてた。
「おはようございます。さっそくに始めさせていただいて、よろしいでしょうか」
沼野がへりくだった態度で、鬼畜なおうかがいを立てる。
「わしは抜き身で、まだ跡始末をしとらんぞ」
「いえいえ、蒲田様と穴兄弟になれるのですから」
沼野が千円札を取り出して、鉄棒に釣るされた箱に入れて、バスケットからコンドームを取り出した。小谷も同じようにして、二人して競うようにコンドームを装着する。こいつら、他人の前で性器を露出して、恥かしくないんだろうか。なんて、言えるわたしじゃないけど。
沼野が後ろからわたしを犯し始めた。小谷は、わたしの口にペニスを突っ込んで乱暴に

動かす。イラマラチオどころか、オナホール扱いだ。
　名前を知らない青年は順番待ち。は、できなかった。
「ねえねえ、おにいちゃん。カスちゃんとあそんでよお」
「俺、ロリコン趣味はないんだけどな」
　そんじゃ、来るなよ。
　結局、カスちゃんの懇願に負けた形で、遊び始める。
　三人が終わった直後に、乗用車が三台立て続けに到着して、八人様ご案内。
　それと入れ替わりに蒲田（と運転手）は帰った。モリトクとチグサは、順番待ちの整理係と、わたしたちの清掃係。コンドームを使っても、アナルＳＥＸだとお尻が汚れる。足洗い場から水をくんできては、わたしたちにぶっ掛ける。タオルで拭いてくれるのは、参加者の服を汚さないためだろう。
　同時に二人ずつといっても、タイミングはばらばら。わたしも（早く終わらせたいから）できるかぎりは協力したけど、オーラルよりは、バギナやアヌスのほうが、具合が良いみ

たい。イラマラチオに手こずってるあいだに、股間では三本の出入りがあったりした。
　一時限目が終わる九時四十分のチャイムまでに、イラマラチオが六本と、バギナが七本にアヌスが三本。一万六千円の募金が集まった。もちろん、わたしのお小遣いになるわけじゃない。手数料とかで三割差し引かれて、残りはカスちゃんの父親が横領したお金の弁済にあてられる。一千万円（以上）には、焼け石に水。すこしは助けてあげてるって実感なんか、まったくない。
　七本目が口に突っ込まれたときには、もう顎がだるくて舌がマヒしてて、こっちから積極的に奉仕するなんて不可能になってた。もう、好き勝手にしてちょうだい。
　だけど、バギナとアナルは、まだまだ健在というか。あわただしい挿入と乱暴なピストン運動と性急な射精とを繰り返されるうちに、すこしずつマグマが貯まってきた。
「あああん……ちもちいいよお。とんじゃうよお……おちるよお……うあああ」
　カスちゃんみたいにオーガズムったりはしないけど、気持ちいいか悪いかの二択だと、

『いい』になる。アナルを使われないときでも、三本くらいを目途に、水を掛けられるのが、実はすごく気持ち良くなってきてる。運動で体温が上昇するんじゃなくて(わたしは、あんまり動いてない)、摩擦熱が発生してるのかな。

四時限目の終了チャイムが鳴ったときには、正確な本数はわからなくなってたけど、五十本まではいってないと思う。

カスちゃんと合わせて、百本弱。一分と休めずに犯され続けてる。でも、順番待ちの行列が長く伸びたりはしない。事前に予約してるのか、さっと来てぱぱっとすませてとっとと帰って行く。ＳＥＸで青い果実を貪り食らうって感じじゃなくて、ひたすら義務を果たしてるって印象もある。

「すまんな。これも近所づきあいでね」

そんなことを言った人もいる。

もしかすると、これは究極の口封じの儀式だろうかと、疑ってもみた。蒲田やモリトクの悪行が暴露されたら、そのときは村人全員が一網打尽だものね。

五時限目が始まる頃になると、カスちゃん

がギブアップ。
「まんまん……いたいおお。おしり、こわれちゃう。もう、やらよお……」
　盛大に泣きじゃくり始めた。アクセルを目いっぱいに吹かしたあとは急ブレーキ。暴走族が、そんな走り方をするよね。
　わたしは、安全運転――で、じわじわと加速がついて、マグマが沸騰し始めた。
　アヌスをがしがし突かれると、痛覚はすでにマヒしてて快感がうねくる。バギナも、入口をこすられて、アヌスよりも重厚な快感。
　もう、爆発しちゃいたいって欲求が、どんどん膨れあがってる。午後七時まで、まだ四時間以上も残ってる。爆発して、さらに追い上げられて爆発して――それがずっと続くとは、さすがに思えない。どこかで、カスちゃんみたいに泣きわめくことになりそうだけど。
　このままマグマが蓄積してって大爆発を起こすよりは、小出しにオーガズムったほうが体力的にも楽かな。なんて、自分に言い訳して。
「おねあいえう……いかえて！　おぱい、いいめて。くいといす、つねってええ！」

カスちゃんに負けず劣らずの舌足らず。でも、わたしの意志はじゅうぶんに伝わった。
メスマ●コに突っ込んでたペニスの持ち主が、腰に手をまわしてクリトリスをつまんだ。
すっかり勃起して半剥けになってるのが、自分でもわかる。
それに爪を立てられた。
「ひびゃあ゛あああっ……！」
電撃のような鋭い痛みが腰を突き抜けた。
順番待ちをしてたやつが、わたしの背中を抱え込んで、乳房をわしづかみにした。ぎりぎりと爪ごと指を食い込ませて、さらにねじった。
「いあいいあいいあいいい……！」
そうされたまま、ペニスが引き抜かれかけて、一気に奥まで打ち込まれた。
「うあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ……！！」
小出しのオーガズムなんて、あるはずがないじゃない。マグマが一気にほとばしって、腰が砕け散って、全身がひび割れた。そこからもマグマが噴出して。
「ああああっ……ひい、いいいい！」
肉体が粉々になっても、手首と足首が鉄棒

に縛りつけられてる感覚は、しっかり残ってる。そこに肉体の破片が集まってきて、またすぐに大爆発。

ペニスが抜かれても、すぐに新しいペニスが押し入ってきて、新たなマグマを引き出しては大爆発させる。

「すこし休ませてやりましょうか」

わたしを貫きかけたペニスが、心配そうな声で尋ねてる。

「そんなことをしたら、かえって恨まれますわよ」

チグサがけしかける。ペニスが押し入ってきた。同じ女の言うことだから、男は信用しちゃうんだ。わたしとしては、縛りつけられたままでもいから、ふんわかと余韻を楽しませてほしい。

それなのに、ピストン運動が始まって、乳房を乱暴にもみしだかれて、クリトリスをつねられると、またすぐに大爆発を起こしてしまう。わたしの小さな体には、無限のマグマがひそんでる。

五回目か十回目かの爆発で、わたしの意識は飛んでしまった。そして、意識を取り戻し

たときには、もう陽が傾いていて、募金活動はまだ続けられていた。
「み……水を飲ませて」
　口に突っ込まれていたペニスを吐き出して訴えた。朝からずっと水を飲ませてもらってない。喉が渇くというより、内側でくっついてる。
「おおい、先生。目を覚ましたぞ」
　わたしに吐き出されたペニスの持ち主が、モリトクを呼んだ。後ろに取りついてるやつは、自分には関係ないとばかりに、アヌスを犯し続けてる。
　すぐに来たモリトクに、わたしは訴えを繰り返した。
「この人の蛇口から飲ませてもらったら、どうだ。それとも、先生のを飲みたいか？」
　どっちも嫌！　なのに。意地悪をされるのが怖くて、断固として拒絶できない。
　全裸のほうがフォーマルにさえ思えるような破廉恥な過激露出制服にまで甘んじて拒否を貫いた……それはお茶漬けだけで、直接なら飲んでもいいと妥協しかけたんだっけ？
　いや、駄目だ。性奴隷（それとも公衆便女？）

にまで堕ちても、それでも、顕微鏡で探さないと見つからないくらいのプライドは残ってる。それに。一度は全身全霊で拒んだ恥辱を受け容れてしまうと、地獄の底を突き抜けて堕ちていきそうな予感がしてる。

まともな水を飲ませてくださいというお願いは、拒否権の発動になるんだろうか。先を丸めてないワイヤー鞭の百発か、クリトリスにバーベルを釣られての駿河問か、そんなのと引き換えに……ぶるんと、頭を振った。これまで、屈辱も激痛も、わたしが予測した範囲に収まってた例はなかった。ワイヤー鞭よりも駿河問よりも、もっとずっとひどい目に遭わされると覚悟しておくべきだ。

それくらいなら……水なしでも三日くらいは死なないと、うろ覚えしてる。半日くらい、どってことない。いや、あと数時間だ。

モリトクは、沈黙からわたしの意志を読み取った。

「強情なやつだな。だからこそ、虐めがいがあるのだがな。小坂さん、かまわずに続けてください」

モリトクがわたしの視界から去って行った。

「それじゃ、まあ……仕切り直しといくよ」
　小坂はわたしの返事を待たずに口をふさいだ。
　いっそのこと、コンドームをはずしてくださいってお願いしようかと思って、その考えはすぐに捨てた。ＳＴＤのリスクはともかく（じゃない）、精液なんて、喉がいがらっぽくなるだけ。これだけ喉が渇いてたら、ちゃんとゴックンできない。
　――それから。七時限目の終わりのチャイムを聞いて、最終下校時刻のアナウンスを聞いて、そこからさらに六本を突っ込まれて。ようやく募金活動は終わった。事前に聞かされていた二本同時で十五分ずつよりもハイペースだったと思うけど、それでも定刻まで責められ続けたのは、キャンセル待ちの人まで呼び集めたのかもしれない。
　ノルマの八十本が百本に増えたところで、たいした違いはない。どっちにしても、ふつうの女性なら一生かけて経験する数よりも多い人数だと思うし、でも本数のギネス記録は（二十四時間で）三百本だっけ九百本だっけ、それよりもずっと少ない。まあ、最年少記録

ではあるだろうけど。
　鉄棒の張り付けから解放されて、わたしもカスちゃんも地面にぶっ倒れて、そのまま動けなくなった。
　後ろ座席を倒してビニールシートを敷いたワゴン車に積み込まれて、ねぐらまで配送された。
「すまんな。わしは年じゃから、おまえを抱えたらギックリ腰になるわい」
　自力で動けるようになるまで、わたしは二時間以上も玄関口に転がっていた。カスちゃんはそこまで無慈悲には扱われず、拷問台のベッドに寝かせてもらえたんじゃないかな。根拠はなかったけど、そんなふうに考えて、カスちゃんを羨ましく思った。